



エコツアーカフェKOZU
開催のお知らせ

神津島

を知ろう!!

ゲスト梅田勝海さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、
参加自由です。

「エコツアーカフェ」は、地域や、地域の未来などに
関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時 11月12日(火)

午後 7:30 ~ 午後 9:00

会場 開発センター

主催 神津島村商工会 (Tel 8-0232)

テーマ

島の鎮守物忌奈命
島の造りの神阿波命

について



島造りの神、長浜神社

長浜はその名が示すように長い白砂と五色の小石の海岸で、村落からは北側へ約三キロほど離れている磯です。

最近では沢尻海岸、温泉保養センターを経由する道路が出来てから、日曜日になると子供連れの家族で貝採りをしたり、水遊びをしている長閑な風景を見る事が出来ます。

この海岸の奥まった所、竹垣で囲った防風林の上に、コンクリトの大きな鳥居が見えます。

鳥居を過ぎて境内に入ると小川に神橋が架かり、その奥に神話の時代に神津島を開かれた、阿波命神を祀る阿波命神社があり、島の人たちは長浜神社と呼んで特別な篤い信仰を寄せている神社です。

六国史の日本後紀の後を承け仁明天皇の治世一代を編纂された、「続日本後紀」の記述の中に古代のこの海岸の事が細かく描写されていますが、その記述と現在の長浜の姿が一致していることに、感動を覚えます。

特に海岸に青、赤、黄、黒、白色の小石が敷き並べられていて、この海岸を五

色浜と呼ぶのは、この「続日本後紀」以来になるのでしょうか。

数年前豪雨のために境内を横切って流れる小川が、上流からの流木や土石に遮られた泥流、で御本殿脇の石垣を破壊し勢いを増した泥流は、御本殿を破壊してしまいました、

その後島の人たちの奉仕作業が続き、海岸まで流された狛犬や石灯籠も掘り出され、元の位置に戻され災害を起こした小川も、兩岸の石垣を高く積み上げまた新しい神橋も架け替えられました。

御本殿も以前のように回廊を巡らせて復旧しました。

コンクリト、ブロック建ての直合（なおらい）の御帳屋も、今は神殿造りの建物になるなど、面目一新しています。

境内入口の鳥居の根本や御本殿の前の階段の上に、扁平な小石に濡れた海岸の砂を盛り上げ供えられています、これは大漁祈願や船出の安全を祈るとき、この「塩花」を神の前に捧げて加護を祈る習わしが今も続いています。

これについて「古代、神は海から来訪すると思えられていた、海岸の濡れた砂や小石に神が籠るのでそれを神に供えたものである、また海の砂や小石も神であるという考えを神津島の「塩花」は伝えているもの」と話してくれた方があ

りました。

またこの海岸の小石を持ち去ると災いがあると伝えていますが、これも神の宿る石と言うことが忌事として頑なに守られて来たものと説明してくれました。神橋を渡り境内の右側の自然石の石積は旧神殿のもので、古来の物が良く保存されているとして東京都の史跡の指定を受けています。

また御本殿の中に大小の甕が収められています。この甕は夜になると神殿から海辺に行き潮水を汲み上げて、女神の御用をする。と伝えられ、いつも甕の底には潮の香りを残し、また床は潮水で濡れていると言われています。

長浜神社の例祭日は春の四月十五日で、当日は島の老若が境内に集い、子供たちの柔、剣道の奉納試合を見たり、終われば長閑な海岸で弁当を使う家族連れで賑わいます。

道路が長浜海岸に出る手前の左側に「三味線・太鼓松」の表示が並んでいます。この松の根元で久しく訪れの無かった、伊豆の夫神がお出でになるので、阿波神はここで神楽を奏して夫神をもてなしました。勿論その頃三味線などがある筈もなく、和琴（ワゴン）とか神楽笛でお迎えしたものでしょうが、たまの逢瀬を待ち侘びる女神のいじらしい心が伝わる言い伝えです。

また仁明紀に戻りますが、今から一一七〇余年前の承和五年の七月から三年間、神津島は噴火を起こしました。

その時火山灰が遠く都まで降り注いだので、朝廷で卜占を立てさせられた、所これは戦火の兆しであり、神津島に座す阿波命神が、先年三島神社の後後である伊豆下田の白浜神社に冠位を授けられたが、本后である私はまだ冠位を受けていない、そのための噴火である」と言うことだったので、承和七年十月に阿波命神と物忌奈命神にそれぞれ従五位下の冠位を授けまた、仁寿二年に阿波命

神と物忌奈命神とも正五位下が授けられました。なを、松本一氏著「神津島の神々」によれば、その後も神階は昇叙され阿波命神は一品(いっぽん)に物忌奈命神は正一位に、加叙されているとされています。

康保四年(西歴九六七年)に施行された、続日本後紀卷九承和七年九月の二十三日、伊豆の国の報告で賀茂郡に造作の島があります、その名は上津島で、この島に座す阿波神は三島大社の本后です、また座す物忌奈命神は前社の御子神ですとあります。

然し、三島大社とありますが祭神の名が示されていません、幕末までは伊予(現在は愛媛県)の大三島に座す、大山祇命神を祭神とされていましたが、文化十

四年（西暦一八一七年）平田篤胤が「二十二社本縁」で、三島神の祭神を事代主神説を主張し、当時の国学者や神社関係者に受け入れられ、以後事代主命を祭神としていましたが、明治の後期に平田篤胤の二十二社本縁は、北畠親房の二十一社記の残欠本とされましたが、今なを三島大社の祭神については論争が続いていると言います。

そのため三島大社では事代主命神と大山祇神を相殿としていますが、三島市史では大山祇神を三島大社の祭神としていっています。

そうすると阿波命神の夫神、持忌奈命神の祖父神はどちらなのか、神津島の神社関係者は、事代主神を三島大社の祭神としているようです。

また仁明紀に戻りますが、今から一一七〇余年前の承和五年の七月に神津島が噴火を起こし、それで天上山と神戸山が出来ました。

それについて続日本後紀の巻七、承和五年七月の十八日に、次のような記載があります（十八日、庚酉、有物如粉。従天散霽、（落ちる）逢雨不銷（溶ける）或降或止。また二十日には（二十日乙亥、東方有声如伐太鼓）とあります。

（十八日に粉のようなものが空から落ちてきた、雨が降ると溶け、降ったり止んだりする）。また（二十日には東の方から太鼓を打つような響きがする）とあり

ます。

同じ巻七の九月の項に、（二十九日、申、申従去七月至る今月、河内、参河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武蔵、上総、美濃、飛騨、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六国。一一相続言、有物如灰。従天而雨、累日不止但雖恠異（やしい）無有損害。今茲に畿内七道、俱是豊稔五穀価賤。老農名此物米花云）（十六国から去る七月から今月まで灰のようなものが降ったり止んだりしているが、特に損害は無い、今畿内（大和）山城（京都）河内（大阪）和泉（大阪）摂津（兵庫）の総称）七道（東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道）の総称で日本全国と言う意で、老人の農夫は是は豊穰の印で五穀も値が上がり、降って来る物は米の花であると言う各国からの、報告があつたと記載されています。

それから一年置いて承和九年の続日本後紀の巻九の九月の項に八七〇字の大量の記載があります、私にはその文字の意味がよく理解出来ない始末ですが、判る所だけ記載します。

九月二十三日、伊豆の国からの報告で賀茂郡に造作の島があります、その島の名は上津島で、この島に座す阿波神は三島大社の本后です、また座す物忌奈乃

命は前社の御子神です、新作の神宮四院、石室二間闇室十三基。上津島の本体は草木が繁茂し、東南北の方は巖峻嶒峯（高く険しい）で、人も舟も西に面した砂浜に泊宿が出来る、今は焼き崩れて海は陸地の砂浜に成り二千許里、「中略」従、北の角から干支の未申の角、長さ十二許里、広さ五許里、皆悉く砂浜になる、従、戌、亥の角から丑、寅の角まで八許里、広さ五許里同じく砂浜になる。この二ヶ所は元大海であった。

又険しい高い山がある、その頂に人が座している形の石がある、高さは十許里。右手に剣を持ち、左手に鉾を持っている、その後ろに従者がひざまずいている、そこはごつごつして険しく通ることは出来ない、またそこは燃えていて立ち寄ることは出来ない。

去る承和五年（西暦八三八年）七月五日夜出火、上津島の左右の海は焼けて野火のようである、十二神将のように童子が海に火を点けるが、諸童子は潮を地上のように歩いて、大石に火を点けている、またその炎は天まで達して上津島は朦朧としていて、所々に火がついている、その後雨のように灰が降り都でも灰が降った、祝「ほうり」や禰宜（ねぎ）を集めて占いをしたところ、阿波神は三島大社の本后で五人お子を産まれた、白鳳の時伊豆大島の噴火で土地が増えた、これは三島大社と伊豆下田の白浜に座す伊古那媛命神の神の意として、

両社に冠位を授けられたが、本后の私には冠位の沙汰に預からない、そのために亀火〔荒い火〕を出した、この私の願いに手を貸さない禰宜や国司、郡司は滅ぼされよう、また私の願いが叶えられるなら、天下国郡平安、また産業も豊穰、とあった。

承和七年（西暦八四〇年）七月十二日には上津島は雲煙に覆われたがやがて雲霧も晴れて神が作られた岳〔天上山か〕が見えた、これはこの神の神明のところである。と報告がありました。

このため同じ承和七年の十月十四日に、奉授、無位阿波神、物忌奈乃命にそれぞれ従五位下、以伊豆国造島靈験なり、と有ります。

長々と続日本後紀について述べてきたが、この中で元大海が砂浜に成ったという件について調べてみました。

北の角から未（ひつじ）申（さるの）角とは、返す浜から灯台あたり、また戌（いぬ）亥（いのしし）の角から丑（うし）寅（とら）の角までとは、走る間から観音浦を、元大海であったが今は砂浜に成ったとしています。

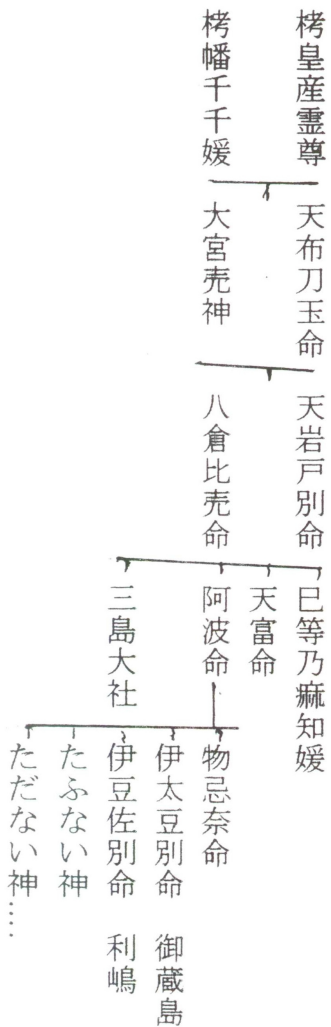
大海が砂浜に成る原因として考えられるのは、当然神津島の噴火でおびただし

い火砕流によるものと思われませんが、まず私たちが現在住む集落も大海であつたと考えられます、それは以前にもお話したように、小学校の体育館の上で地質調査のボウリングを行ったとき、五〇メートル掘り下げた時、角の摩耗した丸い海岸の浜辺で見る小石が採取されたと言います、そのため調査を担当された人たちは「ここは昔は海の渚であつたのでは」と話あつたと言います、神津島の噴火の折天上山の「入らないが沢」を火口として噴き上げ湧き上げ立元に流れ落ちる火砕流は神津沢を造り、長沢海岸には火砕流と共に運ばれた岩石を積み上げ、波と風によって吹き上げられた火砕流は現在の村落を形造つた思われ、そうであれば古代の人たちが半坂や焼山に住まいを構えた理由も判るように思え、おそらく今の開発センター辺りは海であつたのではないでしようか。然し、判らないのは火砕流で出来上がった岩や砂が何処から運ばれたものか、単に海からと言われればそうかと頷くしかありませんが、島嶼町村制公布で名主から村長になつた第三代の村長、藤井松次郎氏から聞いた話を載せてみます、元大海であつた所が自然の力で平坦な土地が出来たが、この土地の土石は多幸からのもので、多幸湾の沖合には昔土地が陥没した折の松の木があり「松の木+どうし」と言っていると言きました。

また返す浜から観音浦までは神戸山の噴火ではないかと思ひます。

なを、阿波命神の託宣で冠位を求めて噴火したとされますが、これは伊豆の国の神社を三島系に組み込もうとする、ある意志が働いたとは思えないでしょうか、当時伊豆の吉田村の出身の卜部平麻呂の存在を感じてならないのです。平麻呂は異色の人物で、承和年代の初めに遣唐使に参加し、その後は宮中の神事を掌る神祇官の権大裕宮主に昇進、宮中で大きな勢力を持ち、伊豆の国神の神階の昇叙に大きな役割をしたのではと考えているのですが。

阿波命神の系図



島の鎮守、物忌奈命神社

高天原の岩戸に天照大神が、須佐之男神の悪行のために籠られた時、忌部「いんべ後に斉部」の祖神の天布刀玉命(あまのふとだまのみこと)、は榊を持ち祓いを行ない、中臣(なかおみ)後の藤原氏)の祖神天児屋根命(あまのこやねのみこと)は祝詞(のりと)を奏して、再び天照大神を岩戸から引き出しました。

この天布刀玉命は御兄弟とされる、瓊瓊杵尊の天孫降臨の際は、これに随行した神で神津島で明神様と呼んでいる、祭神の物忌奈命神は曾孫に当たり、長浜神社の阿波命神は孫に当たるとしている文書があります。

物忌奈命神は、島の村落の北側に広大な境内地を持ち、表門に二基、裏門に一基の鳥居を構え、参道の両脇には数百年の歴史を秘めた椎の木やたみの古木が鬱蒼と繁る神域を持っています。

また戦中焼夷弾のために焼失した神門と、薬師堂も、シロアリの食害を受けた拝殿もそれぞれ復旧し、旧の姿に戻っています。

その拝殿の奥に一段高く本殿が建ち、本殿の中に中宮がありその中に御神体を収める内宮があると言います、この中宮は軸組も土台も本殿とは独立して建て

られていますので、この本殿を覆殿と呼んでいる人もいます。

この中宮は正面に階段を設け、美しく勾配のついた屋根は檜皮葺(ひかわぶき)と言ひ、檜の樹皮を薄く剥ぎ取りそれを何枚も重ねて葺き上げたもので、欄間の彫刻物は建築以来二百年経た今でも、当時の色彩を失わず本殿の構造を始め昔の匠の技の冴えに、改めて畏敬を覚えます。

続日本後紀の卷七の仁明天皇の承和五年(西暦八三八年)の九月の項に「去る七月から今月まで、河内、駿河、参河、伊豆、甲斐、武蔵、上総、美濃、飛驒、信濃、越前、加賀、越中、遠江、播磨、紀伊等十六国から相ついで言う、ある物は灰の如く天より降り、終日止むことはない不思議なことであるが損害は無、い、老人の農夫は「豊穰の印で降って来た物は米の花であると言う」と記載されていますが、それから二年後の承和七年(西暦八四〇年)の続日本後紀卷九九月の項に、去る承和五年七月五日夜出火、上津島左右の海中焼け炎は野火のよう、十二童子はそれぞれ松明を持ち海に火を点け、諸童子は潮も水も、地上のように歩き、大石に火を点け炎焼(えんよう)天に達しその間雨のように灰を降らした」とあり、またこの項の中に、北の角から干支の未(ひつじ)と甲(う)の角、長さ十二里許里、広さ五許里、戌、亥(いぬ、い)の角から丑、寅(う

し、とらゝの角、長さ八里許里、広さ五許里、皆悉く沙浜に成る、是は、元は大海であった、としています。

この元大海と言うことはどういふことなのか、興味が湧いてきます、古代の神津島の住民たちが、宇半坂、焼山などに住まいの跡を残しています、また村の開発センター上の道路改修をするとき、この道路敷きの下におびたらしい貝類の殻が重なっているのが見付かり、なぜ村の人たちはここまでゴミ捨てに来たのだらうと思つたことがあります。

その後伊豆諸島考古学研究会の人々の発掘調査で、縄文中期から奈良時代までの遺蹟が見付かりこの貝殻は、此の半坂や焼山に住まいをしていた古代の人たちのゴミ捨て場の貝塚ではと考えるようになりました。

そして此の下辺りは元海であり、また村落を作っている土地が、~~海~~平坦な土地があつたら古代の人たちがこの高い所に住まいを作る筈もありません。

神津島村教育委員会編の「神津島、自然・人文と埋蔵文化財」に拠ると、半坂遺跡からは縄文前期から平安中期の遺物が発掘されているされていますので、忌部の人たち、それは阿波神一族の住まいかとも想像しています。

明治維新前は官社の待遇の阿波命神社と物忌奈命神社は、葦山県時代から郷社

として祀られていましたが、足柄県に移管された折、三島大社の宮司の萩原正平が県社に昇格すべきと足柄県に強く要望した結果、明治九年三月に足柄県社となり、その後東京府に移管されてからも東京府社に列せられていました。

以前、この物忌奈命神社の例祭は毎年旧暦の六月中の酉の日に行われていましたが、そのため毎年例祭日が一定せず、いつの頃か不明ですが旧暦の六月十五日に変更されました、明治四十五年（西暦一九一二年）に

府社 物忌奈命神社

社 司 松江 半之助

氏子総代 因幡 清 八

氏子総代 梅田 又五郎

古例の神饌中陸稲、海草が成熟しない。その上本島古来からの唯一の鯉漁の初期で不便を訴えている、本年八月一日は恰も昔の祭日であつた旧暦六月中の酉の日に相当するので、今般この日を本神社の例祭定日と致したく、特別の御詮議相成りたい、

と東京府知事安倍浩宛てに願ひ書が提出されて、同年御月二十八日に許可され、以後八月一日から例祭日が変更されています。

各地で神社と漁業の行事が関係を持つ例が多くそれぞれに歴史的な色彩を持つものが多い、神津島の神社の行事も漁業と関係を有しているものがあります。

昔、文化文政時代に島は鰹漁が豊漁を続け、この時代に島の菩提寺、濤響寺本殿、鎮守の物忌奈命神社本殿を建築するなどで、或る人は「昔は札で障子を貼ったもの」と聞き、「札とは何と」聞き返したことがありましたが、よく説明してくれなかったことを思い出しています。

然し、この鰹漁も装備の整った内地船の流入でトラブルが頻発して、千葉県、神奈川県、静岡県、三重県の各漁業の団体と契約を結び、地元の利益も考えて操業していましたが、明治の中期に、ついに島側は鰹漁から撤退のやむなきに至りました。

その頃静岡県の人で島で医師をしていた、吉田藤齋が「赤背」と言う青魚を獲る網を改良して使用したところ、成績が良かったので、島の人が買い求め巾着網と称して新しい漁法に、鰹漁からはみ出した漁船が二隻で組を造り操業を始めました。

その後もこの巾着網漁業は島の漁業の中心となり、鰹漁から手を引いた数組の網組が漁場争いを回避したいと漁場を区切り、神前で籤を引き神意であるとし

てそれを現在も固く守っています。

当時は十組を数えた網組も、現在は三組となりそれも共同で実態は一組で巾着漁を経営していますが、これも後継者不足と漁獲量の減少もあるのでしょうか、しかし、この籤祭りの行事は鎮守の神前で今も続けられています。

鎮守の物忌奈命神社の例祭日は、七月三十一日の宵宮から八月二日まで行われます、境内には商工会青年部による出店もあり、昼夜神社は賑わいます。

二日の午後、東京都の無形文化財の指定を承けた、鰹釣り行事が若い人たちで奉納されます、前記の鰹漁業での島の繁栄は今も語り伝えられ、それが伝統の形で残されたものと思います、因みに冷凍技術の無い時で鰹はすべて鰹節に加工され、当時隣島の製品より三割高く売れたものと祖父から聞いたことがあります、神津の水が良いから言われたが、それは島の人のためが(手を使って労をいとわず良い品をつくる)からだ、祖父は付け加えて話してくれました。

その鰹釣りを模した行事は、二組の若者たちが青竹で舟様の物を作り、その中に入って先ず神前で、お祓いと餌に見立てた餅と干菓子を戴き、境内を周回して出漁、餅や干菓子を播き群がる子供たちを鰹に見立て、それから鰹釣りを行い、寄港して鰹の入札(この入札は縁起で高額な金額になります)水揚げした鰹は

樽に入れ、女子に扮した若者が樽を頭に載せさも重そうに、よろめきながら境内を歩き、それで終わります。素朴な演技ですが大事な行事ですが、過去の漁業の歴史を表し、豊漁を願う祈りなのかと思われれます。

また、例祭の一日と二日には神輿の村内の渡御があります、若者たちの神輿と小学校児童の子供神輿が四基ほど村の中を練り歩きます。この神輿の渡御については、明治二十二年頃村にコレラが蔓延し、その疫病退散を祈り島の若者が、物忌奈神の御神体を収めた神輿を担ぎ、村中を駆け巡ったことが初めであると言われ、その神輿は大切に保存されていると言います。